



Title	支那文明の復興と日本
Author(s)	辜, 鴻銘
Citation	懷徳. 1924, 1, p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

亞文明の精髓を發揮宣揚するに努力せんことを期すと云爾。大正十三年六月十六日。懷德堂教授松山直藏識す

支那文明の復興と日本

辜

鴻

銘

本篇は漢洋學に通じ、世界各國人に名を馳せた辜鴻銘氏の著で京滬各外字紙に寄書せられたるもので、佐原篤介氏が譯して弊社に寄せられたものである。本篇の題目は「日本の將來」であつたけれども、支那文明の復興は日本の天職であり、日本は泰西文明の利器を採用するも精神上に於て泰西化してはならぬとの意味を示すべく、敢へて斯く改題したのである。（大正九年五月「上海」所載）

エー、エー、フルード氏は其の基督教の哲學と題する論文中に於て次のやうに言つてゐる。

或るあたゝかき夏の朝、其の繁れる葉のかげに、面はづかしげに、かくれたる、にはばら（モツス、ローズ）の「の不圖、其の根のかたをうち見やりたるに、おのれのそだちたる、そのもとのつちくれ、眼に入れり、之れをめて、如何にも穢はしき、つちくれなるよ、われこそは、花と云ふ、花のうちの最も美しきものなるに、如何なばかゝる厭はしきうちに、つながりあるなりや、と嘆じける、かくて、此のにはばらの蕾は、大空におのれのもてをいだしたるに、道行ける最初の人の手につままれて、花たば（ノーズゲイ）のまなかに逃がれて、誇りに覺へたりしに、その勝ち誇れるすがたも、まことに短かきつかの間にして久しからず、うちしなびて、かれにけり」

さて此の美しきモツスローズの蕾こそは日本にして、此の美しきモツスローズのそだち居たる穢はしきつちくれこそ支那なれ、其の美しきモツスローズの蕾のおれの勝ち誇らんとて逃れ入らんとせる花たばこそ現代の歐洲の文明なれ。

日本人の友人は何が故に支那人と日本人の間に此の如き反感を有し居れりやと問へるあり、われは之に答へて曰はく『親の遺した寶を爭ふものは兄弟です』と即ち他人よりも兄弟の間に争は屢あるものなりと云ひたり、げに支那人と日本人の間に存在する反感は、ありし昔、佛蘭西人と英國人の間にありたるに等しき反感なり、蓋し此の反感は英國人が佛蘭西人よりも甚だ遙かに優れりと考へたる爲めに外ならざるなり。

即ち英國人は佛國人を以て田鶏（フロッグ）を食用する穢はしき劣等の人類と見下したりし也、加之ならず、曾て英國人中には一人の英國人は六人の佛國人を打倒すの力量ありと信じ居たり、換言すれば佛國人と英國人の間に曾て反感を生ずる事ありし所以のものは英國人に於て佛國人に對し、自から優等の人類なりと態度を示し居たるを以て也、これと等しく支那人及び支那の一切の事物に對して日本人が之れに優れたる所ありと云ふが如き態度を有するとの感情が日本人に反對する今日の支那に於ける支那人の心の底にひそみある次第也

曾て佛國人を見下したることある英國人が英國國民の最善のしかも最もけだかき性質の始め佛蘭西より傳來せるものにして實に眞の佛蘭西よりのもの即ちノルマンフレンチより承繼せしものなるを氣付かざりしこそ實に不思議ならずや、彼の氣風の精練せられて頗る禮儀正しき英國の貴族の風は曾てトーマス、カーライル氏の稱賛して措く能はざりし所なり又た其の品性の勇敢にして崇高なりし爲め英國のバブリックスクールの青年學生が其の敵の倒れたる時決してこれを蹴るを肯んせずと云ふが如きシエヴァリエの氣風、即ちわれの呼びてレリジョン、オブ、フエアーネツスとなすものゝ如きすべて此等の道德上の品質は英國人の自から誇とする所なれども、之れ決して英國人の特性にあらずして全く純然たる佛蘭西人の品質のノルマン、フレンチの戦勝者によりて英國に齎らされて武士道の根源たりしものなりとす。

右と等しく今日の日本人は支那人を見下しあり、日本人中には否認するものあるをわれは知れども日本人が其の今日に到達せしは全く支那人より學べるものなり兎も角も、英國人及佛蘭西人はその氣風に於て精練せられ、其の人格に於て崇高なる優秀の人類なると等しく日本人も之れを以て誇りとなしあり。而して此れによりて、支那人より優秀なりと考へあれども、此等の風格たる元來眞個日本人の特有のものにあらずして、寧ろ支那人の風格より得たるものなり、例へば日本人中には外國人に向ひ、東京に四十八士の浪士の墓所あることを示して、此等の浪士の其の藩主の仇を報じた後、切腹せるの逸事を誇る、されど今日日本に占領せられある支那の青島にては四十八士はおろか、五百人の支那の浪士が其の主たりし田横の漢の高帝の爲め死せりし時、其の主に對する忠義の心を明らかにせん爲め自殺せしは今より二千年前のことなり、實に新渡戸博士の全く日本の創意によつて生ぜるものとなす武士道は、始め支那より此の精神を得來れるものなり、日本の歴史に於て最もヒーローとして崇拜せられし人物たる楠公は、此の範を支那に於けるバヤード (Bayard) とも云ふべき、即ち佛蘭西語にて云へば (Chevalier Sans peur et Sans reproche) も申すべく、關羽に取りしものにして、支那人は此の關羽のミリタリズムの名義上の保護者 (Titular Guardian of Militarism) として崇拜しつゝあるなり無學なる外國人は關羽を以て支那の神 (God opolwar) と稱し居れり。

誠にわれは人を否日本人をすらも驚かすの言をなさんとするなり、即ち今日の日本人は眞の支那人なり、即ち唐朝時代の支那人たるなり、唐朝に於ける支那の文明は滿開の花の如く其の盛に達しありし也、われ等支那人はモンゴールの元朝時代より、半ばモンゴール化せられたる支那人はモンゴル人の不潔にして、不始末に、どちらの性質をも承繼せるなり、支那の國土のうち支那の文明の粹なる、精練せられたるものを今日迄傳へある唯一の場所に浙江省及び江蘇省あるのみ、宋期の漢人の皇帝は其の宋中の人々及び貴族と共にモンゴールの游牧の民の襲撃を逃がれて浙江省の杭州に其の都を移したり、此の如くにして此等南方の兩省の人民中に支那の文明の純然たる特色の粹として精練せられたるものを保存するを得たる也。

約言すれば、今日に於ける支那の文明の眞髓を得たる純然たるものは即ち日本よりと言ふべき也、今日の支那に於ては漢及び唐の時代に於ける眞の支那の文明は即ち支那文明のアート、アンド、コスチューム(文物衣冠)は元朝の前後に於て支那に來れる游牧の民たりし韃靼の群衆の爲めに踏み荒らされたりし也、日本を攻めたりし成吉思汗の兵艦が嵐(フォア、ウインズ)の爲めに *afatus te dsipavit* 即ち吹かれて散らされたるは誠に神の不思議にして、これあつて眞の支那文明を太陽の照らしたる青々としたる日本の小山多き海中の諸島の上に遺し、神の作られし此のヒクチュア、フレームのうちに收めて、全世界の人々をして今日迄之を見るを得せしめ且つ稱賛せしめ得たりしなり、敎授ローウス、デイツキン氏曾て云へるあり「世界のうちに於てわれの旅せる國のうちに於て日本こそわれをしてありし昔の希臘こそかくありしならんと思はしむるものを想はしむる唯一の國なり」と、さて日本に於ける文明の状態と支那に於ける文明の状態との相違を見んことを欲するものあらば上海に於ける六三園と稱する日本人の花園を見たる上に於て北京に於ける胡同内の家の一に往き比較して見るべし、その上に於けるリクレス時代の希臘より歐洲の歴史に於けるミッドルユーヂの野蠻時代の歐洲の中心に移り往けるが如き心地するなるべし。

さて、わが歐洲人の友人等の多くはわれの日本に對しての痛切にして且つ熱狂(ファナチック)せる如き賞美の辭を呈するを驚奇の眼を以て見るならん、然れども此に之れを説明するに足る或る物あるなり、曾て日本の學者岡千仞氏の來りて今より約四十年前に支那を旅行し、その旅行の物語を記せる一書を公けにせり、此の中に香港に於て或る家の四階の小さき部屋のうち貧しき一人の日本の女子と相逢ひたるを記せるありその何の故に支那に來れるかを問ひたるに、彼の女子は答へて曰く、われに一弟あり此の教育を全ふせしめ其の爲めに資を求めんとして來れるなりと云ふ。われは曾てスコットランド大學に於て學び居たりし時、ソフォクレス及び希臘人の詩を讀みしことあり、われは常にアンチゴネ及びイフヒジニアを以て女子の最も崇高なる風格を有せるものとして賞讃し居たりし也、然れども此の現在の第十九世紀の日本に於てわれは希臘の歴史の上に於けるアンチゴネ及びイフ

ヒジニヤと同格の女子あるを見たり、實に日露戰役の際滿洲及び旅順の役に於て日本人と戦ひたりし露國の大官は曾てわれに語りて曰く、日本人の勇敢なる(ヒロイック、ブレヴァリー)は實見せざる人の信を措く能はざる程のものにして、世界に於ては曾て僅に一度見たりし事あるのみの程度のもの即ち古への希臘のサアモビレーの山道に於て見たりとして記るされしものと等しかりし也と、多くの人々は日本人を以てモーラル、ビーブル(德義ある人)にあらずと云ふ或は日本人の法律上の文面にのみによればモーラルにあらざるやも知れず、然れども日本國民はモーラル以上更に超越せるもの也、此の故に歐洲人中其の風格の崇高なる人物たるラフカディオ、ハーン。サー、エドウィン、アーノルド、及び佛國のアカデミーの會員たるブリウ等の人に於てのみ始めて眞の日本人の風格を諒解し能ふのみ。

さて世人は何が故に日本のみ泰西各國の侵略に反抗しそれを防ぎ成功せる唯一の亞細亞の國民なりやと不思議に思ひ居るなり、かのベキン、ダストの著者たる米國人の婦人ミツス、エレン、ラ、モットの記るせるあり、曰はく『日本のみは東亞の國民中にて歐洲人の爲めに踏みつけられざりし唯一の國民なり』と、われの曾て云へる如く、此れに答ふる辭は即ち日本は崇高(ノーブル)なる國民(ネーション)なれば也と云ふにあり、然れども何故に日本は崇高なる國民なりとするか、日本の爲政者はその國に歐洲人の來りし時たゞ徒らに其の支那より承繼せる文明の外衣を保持せるのみにあらずしてその精神をも保持したれば也。

此に何故に支那人が歐洲人の侵略に對して、全く何等手を下すなきの有様に陥りたりしかその理由をわれは此に指摘せんに、蓋し今日共和國としての支那に於て支那文明のスピリチュアル、フオウミューレーたる支那のリテラティー即ち讀書人なる、教育ある支那人に取りてローヤルティー即ち忠及びフィリアル、バイエティー即ち孝なる文字は乾きたる死せる文字となりたれば也、然れども日本の教育を受けたる人々即ちサムライ(士)に取りては支那文明のスピリチュアル、フオウミューレー即ち尊王攘夷の文字は眞にその精神(リアル、ミーニング)を保ち居たりし也、さればこれ此の精神の存するあり、彼のペルリ提督が始めて日本に到來せる時日本國民は恰かも一

人の如く合致して手に刀を持して彼等の邦家を物質的日本として防がんとせるのみならず更に支那より承繼したる支那文明の眞髓たり結果たる、日本文明の理想（アイディアル）を防ぎたりし也。

二

今やわれは此論文に於て論せんとする要點に到達せり、教授ローウス、ドイツキンソン氏は曰はく。

『日本の文明は此の如くに完全にして、此の如くに單純に且つ此の如くにホモジエニアス（純一發生）なり、（辜氏の注に曰はく此の意味は明治初年のサムライが之を防がん爲めに興起せる所以の支那より承繼せる眞實の純乎たる支那の文明を示す日本文明の理想とす）而して今や此の文明は既に過去の物となれり』と。

『列國の力によりて泰西的たるを避けんが爲め日本は自ら泰西的たるに決し、其の生存を保持する爲め日本は之れを失ふべく決心せり』と。現代の日本に於て見る多くの事物が、此の北京に於てすら見得る如く、右の所言を證するが如く全然確實なりとするも而かもわれはわれの見る所を以てするに、ドイツキンソン教授の此の所言を正しと信じ能はざる、也日本の如き崇高なる國民（ノーブルネーション）がその祖先傳來の高價なる公有の遺産（親の遺した寶物）即ち支那より承繼したる眞實にして純乎たる支那文明の精神を十數世紀間聖くそこなはず純乎として保持し來れるに、今更ら之れを全然打棄て去らんとするが如きことは、われに於て瞬時たりとも信じ能はざる也。

兎も角もわれの此の論文を記せる目的は日本の現時の人々に對し、明治初年のサムライが現代歐洲文明の利器を採用するの決心をなせるは（ドイツキンソン教授に對し全然敬意を表す）決して日本を泰西的ならしめんが爲にあらざりし事を語り且つ此の一事を忘却せざらんことを希望すれば也、明治初年のサムライの目的は歐洲文明の利器を採用することによりて歐洲人の足により踏まれざる様にし、且つ日本の泰西化するを妨げんが爲めなりし也。

人われに問ふに何故にわれは現在の泰西の文明を嫌忌するやを以てす、われは茲に公然云はんと欲す、われの

嫌忌するは現代泰西文明其のものに對してにあらず、われの嫌忌するは今日の泰西人士が彼等の現代文明の利器をわれの見る所にては、惡用しある點に存するなり、例へば現代の歐洲人米國人現代の科學の上に於て倒達し得たる所のもの、如き一れを厭ひ若くは嫌忌すべきにあらずして寧ろ眞に稱賛すべきものとす、さればどて歐洲人米國人が此等現代の科學の上に得たる所のものを用ゆる其の用途は、われの見る所にては全く誤まりありて稱賛するを得ざる也、例へば獨逸のなせる所を以て例證となさんに、現代に於ける文明（シビリーゼーション）なる文明の意味よりして歐洲戰爭前に於て、獨逸は歐洲に於て最も文明なりし國民たりしに相違なかりし也獨逸國民は文明の利器を世界の他の如何なる國民も之れに等しき能はざる若くは之れに優る能はざる程度に於て優秀にして且つ完全なるものに發達せしめ得たり、然れども今や此の文明の利器殊に其の武器を惡用したるが爲めに自國のみならず全世界に災害（カタストロフヒー）を齎したり、此の故にわれの現代の泰西文明に對して有するの嫌忌は文明の其の物を嫌忌するにあらずしてわれの見る所によれば單に獨逸の人民のみならず一切の歐米人が現代泰西文明の利器を惡用しある點を嫌忌するを云ふ也。

われの見る所を以てすれば歐米人が彼等の文明利器を惡用し惡用する所以の理由は、彼等が眞の文明の正しき意義（ライト、アイディア）及び計劃（プラン）を發見し並に諒解するに努むることなくして、徒らに文明の利器を増加するに全力を傾注しあればなりバイブルに記しあるバベルの塔を築ける人々の如く、歐米人は現代歐洲の文明を高く高く築造するに努めて眞の基礎を顧みず、爲に此の現代歐洲の文明の驚嘆すべき建造物はバベルの塔の如く倒れ若くは倒れて粉碎せられんとしつゝある也。

さて文明の正しき意義、計劃、若くは基礎と云ふはスピリチュアル、フオウミユラの聖典（コード）也、即ちわれの名づけて道德の標準（モーラル、スタンダード）と云ふものこれ也、此のモーラル、スタンダードたるや、一の國民若くは一團の國民が文明が此の如きの聖典即ちモーラル、スタンダードを達發せしめ、制定する丈の程度に達したる場合に於てのみ發見せらるべき也、さて歐米人は不運にして未だ此の如きモーラル、スタンダード

を有せざる也、今日歐米に於てはクスチニタイのスピリユアル、フオミユレの聖典即ちモータル、スタンダード已に陳腐となり而して最早如何なる生存の意義（リベイングミーング）をも有せざるに至りし也。

モータル、スタンダードに代へる歐米人は法律（ロー）と稱するフオーミラを有し、之れによりて彼等は其の社會を結合するを試みあり、然れども法律のフオウミラを以て社會を結合するには警察官（ポリスマン）を必要とす、實にガーライルの指摘せる如く今日の歐洲及び亞米利加の状態は純然たるアナキー（無政府）に加ふるにコンステイブル（警察官）を以てせるの有様にある也、真正なる文明の精神を有する國民は法律即ち警察官を要せざるべき也、實にわれは何れかに於て曾て日本に駐紮せる某英國公使の曾て古への日本に於て有せざりし二のものは即ち臭蟲（バックス即ち南京蟲）と辯護士なりと云へるを讀みたることあり。

さて日本の人民は明治の初年以來現代歐洲文明の利器を得る爲めに熱誠に心も精神をもこめたり、われ考ふるに日本は已に文明の利器正しく用ふるを學ぶべき時に達したりと、而して文明の利器を正しく用ふるを得る爲めにはわれの云へる如く一の國民はそのモータル、スタンダード即ちナシヨナルアイディアルを有せざるべからず、而して問題は日本が何處に此のモータル、スタンダード即ちナシヨナル、アイディアルを求めて其の獲得したる現代歐洲文明の利器を用ふべきかにあり、多數の人々は現代歐洲文明の利器を採用せる日本は其の新たなるモータル、スタンダード即ちナシヨナルアイディアルを發見する爲め歐米に赴くべしと考へあり、われの見解よりして、爾かく考へざる也、何となれば眞に教授ロース、デイッキンソン氏の記せる如く「外國の文明よりせる意義は頭腦を變化（トランスフォーム）するを得べきも他人種の精神を侵入せしめ罷はず」（Ideas derived from an alien civilization may transform brain but can not penetrate the soul of an alien race）其の得たる現代歐洲文明の利器を正しく用ふる爲め日本は古へよりのモータル、スタンダード即ちナシヨナル、アイディアル即ち支那より承繼せる眞の支那文明のアイディアル眞髓を保持せざるべからず、加之多年現代歐洲文明の利器を得んが爲めに全力を集注したる日本の人民はわれの見る所によれば、明治以前に於て日本の有せし日本文明のモータル、

スタンダード即ちナショナル、アイディアル支那文明の眞髓を失はんとするの危険に及びあり、此の理由によりわれは信ず、日本は新たなるモータル、スタンダード即ちナショナル、アイディアルを求めんが爲めに歐米に赴くことの代りに支那に歸へらざるべからず即ち日本が支那より承繼せる其の古來よりのモータル、スタンダード即ちナショナル、アイディアルを恢復し、取り戻さんが爲めに舊支那に歸らざるべからず、われは言はんと欲す、實に現代の進歩せる日本人は今や歐洲人及び歐洲一切の事物を稱賛し之れを見上げありて而して支那人及び支那一切の事物を見下し、輕侮しあり、殊に支那に於て古來よりありし一切の事物を見下し輕侮すれども實は支那殊に古への支那こそはわれの此の論文の最初に於て云へる如く、今こそは眞に穢はしくなりしと雖ども其の育ちたるつちくれにして而かも美しきにはばら（モツスローズ）即ち日本の生れて今日の如くなる迄成長せしめたるつちくれなりしことを忘れざるをわれは切望するもの也、茲にわれは更らに今日の現代の進歩せる日本人の注意を喚起するを欲する一事あり、即ち彼等はきたなき支那人を彼の壯麗なる家屋に居住する歐洲に比較して見下すと雖ども、まことにうるはしき物語あることこれ也、即ち不幸にしてその人は今や他界したりしも曾て一人の日本の貴女ありたり此の貴女に彼の日本人の友人の此の貴女使ひ居たるきたなき支那人の下男のことを批評したるに對して『つやれを着ても心は錦です』と答へたるこれ也。

此に此の論文の結論として云はんと欲す、日本のみならず極東の將來は、日本自から泰西的たるを防ぎ得べきか如何日本は眞の古來よりのモータル、スタンダード、即ちナショナル、アイディアル即ちわれは再びくりかへして謂ふ、日本が支那より承繼せる眞の支那の文明アイディアルを保持し得るや否やに是頼るのみ也と。

若し日本にして之れを保持する能はず、其の外衣のみならず精神迄も泰西化せしめたらんにはその時こそ日本がフルード氏の物語の如く其の美しき花たばのうちに入り、數時間の榮耀をして終にしほみ枯れ去る根無し花の如くならんとするものあり、されど若し日本にして眞の自國古へ支那より承繼せるナショナル、アイディアルを保つの助けとなさんが爲め歐洲現代文明の利器を用ふるに於ては日本はたゞに泰西化せられざるのみならず更ら

に日本は支那をして泰西化するより禦ぎ得て、最後には日本の力によりて明治時代以前の古への日本に存せし眞實の支那の文明を再び支那に齎らすの使命を果たし得べき也。

最後に簡約の言を以てわれは今日の現代の日本に告ぐ、即ち日本が現代の泰西の文明の利器を採用するを決せる目的のわれは此にくりかへして云ふ、決して日本自からを泰西化せんとするが爲めにあらずして、之れに反し、日本の目的とせる所のものは、日本の國民を歐洲人の爲め踏みつけられざる様保護し、眞實の日本、スピリチュアルの日本、大和魂即ち日本の精神に止まらず、極東の精神を防禦し、安全にし而して之れを保持する爲めにして、又た眞の支那文明の精神は元の時代より以來支那に於て保持せられず、故に日本にして此の目的を達するに於ては恐らくは眞實なる（リアル、アンド、トルウ）支那の文明を復興すること即ち日本の天職なりと云ふを得べし、換言すれば極東全部の人民に向ひて眞實なる支那文明の復興を齎らすこそ、日本の天職なれと云ふを得べき也。

辜鴻銘氏略歴

辜鴻銘氏は福建人にして南洋彼南に移住せる氏の父母は何職業にあるや不明なれども氏は確かに彼南に於て生れたる。

氏十三歳の時在彼のスコットランド人某の爲め才能を確認せられエディンバURGに伴はれ着英後直ちに同地のグランマ、スクールに入學し終つて同地エディンバURG大學に入り成績善く同大學を卒業し、更らに轉じて獨逸柏林に行き同地ポリテクニク、スクールに入學し歐洲各國を歴遊し、始めて祖國の土地を踏みしは二十六歳の時なりき。

歸國後始めて支那固有の漢學を學習し漸く祖國の事情をも知悉し先づ上海マキユリーの記者となりて支那新聞及び支那に關するあらゆる事項の英譯に従事しつゝある間に故湖廣總督張之洞に知られ其幕僚となれり、是れ日

清戰爭以前の事なり。

日清戰爭當時は唐紹儀と共に上海に派遣せられて支那の外債募集の任務を擔當し、張之洞昇進して軍機大臣(光緒末年)となり北上するや、氏も亦張に隨伴し郎中となりたり、日清戰爭以後殊に義和團事件以來支那に於ける革新思想の勃興するに當りて氏の如き漢洋に通せる人物は少からず重寶がられたるが湖北武昌に在る時偶々故伊藤公の漫遊あるや氏は頗る同公に敬佩する所ありたりと自ら稱し居れり其後上海に黃浦江浚渫局の設立せらるゝや氏は支那政府の代表として浚渫事務を管理せり、當時の技師長和蘭人デライキ氏(元我日本内務省傭)と意見の衝突を來たし、爲に右管理の職を辭し、上海南洋公學の教授となりたり、是れ辛亥革命少し以前の事なるか在职中同革命武漢の地に爆發するや氏は極力清朝維持を唱へ君主立憲制を主張して憚かる所なかりしが環境は共和政體の空氣と化し學生の反感を買ひたれば氏は我主義は毀つべからずと云ひて自ら南洋公學を退き、愈々上海に於ける浪人生活の身となりたり、余が辜氏と面會せしは浪人生活の時代にして當時彼は余に向つて英語を以て孔子教は國民を作るものにして宗教は人を作るものなり、彼此截然二分せざるべからずと云へりし事あり、其後張之洞幕僚時代の同僚たりし清末教育部尙書梁敦彥に招かれ北京に赴きしが間もなく各國銀行團の事務に軼掌すること囑託せられたるも久しからずして止め或は北京大學に於て英文教授を擔當し或は塹國公使館の事に當たり、或は支那各地の英字新聞に論文を投書し殊に最近はノース、チャイナスタンド(我外務省機關紙)及上海の一二英字新聞に寄書しつゝあり今に北京に住居せり。

氏は語學に最も堪能にして拉典、希臘、ヘブリユ等古典に精通し英獨佛伊各國に通じ英文著書として最も有名なるは尊王篇、春秋大義オックス、フォード、イン、チャイナ等多數ある中尊王篇は氏が張之洞の幕僚として廣東に在りし際長髮平定功勞者彭玉霜が多病なるに當りて西太后より人參の下賜幾度もあり其度毎に彭が落涙せざるはなかりし逸事を聞き何事のをはすか知らねども式に感奮興起して筆にせるものに係る、氏が依然として清朝君主立憲制を主張して止まざる決心は已に當時に端を發せり、又氏の英譯に係る論語は歐米學者に對し諒解を與ふるに

便なりしとの評高く歐米人に向つて一新生面を開きたりと稱せられ、故沈子培氏の如き東洋思想を彼地に輸入する上に於て多大の益を與へたりと頌せるほどなり、其他大學中庸の英譯もあり之れ又頗る評判好し、殊に如上の著書は更らに獨逸人に歡迎され、辜氏の名は獨逸に於て名を馳せゲツチンゲン大學のネルソン教授の如きは推賛措かず、要するに東洋人にして氏丈けに歐米の思想界に影響を與へたるものは少なかるべし。

漢學に至りては二十六歳より始めたりと稱せらるゝも學者と迄は行かざるも己に詩も作り文章も作り張文襄公幕府記の如き僅かに二冊の小冊子なれども簡潔にして愛すべきなり。

氏は支那人より古怪なる人として評せられ一の癖ある人たることは事實にして、日本の料理屋に招かれて喃々するなど平然たる點あり、偏狹を以て見れば誤解を招くも、決して下卑たる人にあらず、寧ろ天心爛漫たり、事務の才はなければども學に熱心なると漢唐の文明は日本に在りと公言するが如き態度は信念より來るものにして従つて多大の日本ビーキの學者なり。

懷德堂堂友會記事

大正十二年十一月四日午前九時懷德堂々友會創立總會を懷德堂講堂に於て開き會則を議定し會長、主幹及幹事を選舉す會長には全會一致を以て懷德堂教授松山直藏先生を推戴し主幹及幹事は松山會長の指名を以て左の如く當選せり。

主 幹 吉 田 銳 雄

(いろは順)